百合好きな作者が転生したら何をするか←

祭禅雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
百合好きな作者が転生したら何をするか←

【Ｎコード】
Ｎ９６７８Ｍ

【作者名】
祭禅雪

【あらすじ】
主人公は作者です。
もう壱個の転生小説と交互に投稿しますｗ
エイラーニャ大好きです！
好きすぎてもうｗｗｗ
萌えるーーーーーーーって
夜中叫んで迷惑をかけるような作者が若干最強になって転生をします。

百合です・・・百合ですからね！！！！！！！！！！↑

説明

初めまして！
作者の祭禅雪です！
麻壱で行きます↑
本名だったりすｒ（（（（（
なんでもないですｗ

この小説は
ストライクウィッチーズへの
転生です。

それがお嫌いな方。
呼んじゃ駄目ですｗ
キャラ崩壊絶対してます。
それでもよければ次からどうぞｗ
ひぐらしのと壱日交替で上げます（字
文字数をどうやってかせごうかｗｗｗ
作者が百合大好きなんですよ！
一番好きなキャラはエイラですｗ

最初はトゥルーデだったんでけど。。。
エイラのヘタレがかわいすぎて・・・・。
「今日だけだぞ！」
に萌えるんですよ！激しく！！！！！！！！
エイラーニャと仲良くしたいｗｗｗ
てことで、エイラーニャよろしくね！↑

説明（後書き）

はじっまるよーｗ
よろしくです！ｗ

転生。（前書き）

神様なんてでてきませんよｗ
っていうかこれ妄想にはいっちゃうの？？ｗｗ
でも、作者はそれほど百合展開にもっていきません。
見てますよ！陰ながら↑
妄想って言うのは冗談でｗｗ
作者と同じ性格で書くだけですｗ
ま、もちろん！
馬鹿です！ロリコンです！ニートです（しらねぇぇ

転生。

「っつぅ・・・・ここ、どこ??」
「どうしたの?大丈夫??」
「ふぇ?え、えと、誰、ですか?」

なぁぁぁんんてぇぇぇねぇぇぇwww
芳香ちゃん・・・みっちゃんwww
かわいい萌え↑
ってあれ???
待って!
ねぇ!待って!
な、なんで俺は小6の頃になってるのぉぉぉぉ!?
ズボン型のズボンです(は?
ほら、水着でズボン型あるじゃないですか
あれのちょっとだけ長いバージョン着てますw

「大丈夫です」
「そっかぁ、よかったぁ。私は宮藤芳香中学1年生だよwこっちが」
「私は山川美千子です。あなたは?」
「えっと、麻壱です」
「苗字は??」
「それが、気付いたら森の中で寝ていたみたいで・・・下の名前しか思い出せなくて・・・」
「それって帰るところがないの??」
「そう、なります・・・」
「・・・私のところにおいで?」
「芳香ちゃん!?」
「宮藤・・・さん?」

「芳香でいいよwだって、女の子一人おいてけないよw私は守りたいから・・・一人でも多く、ね？」
「は、はい！ありがとうございます！！」

これが、俺と芳香の出会い。
そして、今日は・・・・。
みっちゃんが事故にあってけがをして、もっさんがきて芳香がいなくなっちゃう・・・。
けど、俺はそれでもいい・・・。
ただ、ただ・・・。
俺は、俺のいける路で軍へと行く！

「みっちゃん！！！」
「芳香、大丈夫だよ？みっちゃんはおばさん達が治療してくれたw
w」
「麻、麻壱・・・・」
「で、宮藤、軍に入らないか」

セリフ・・・・台詞ぅっぅぅっぅw

「魔法力も強いし、訓練さえすれば立派な戦力だ！どうだ？」

「そ、そうですか??」
「あぁ!だから是非!わがウィッチーズと一緒に戦おう!」
「・・・私、軍には入れません。絶対に・・・」
「そ、そうか?私もなにもいきなり承諾をもらえるとは思ってなかったからな、ゆっくり考えてくれ」
「・・・」
「それじゃ、明日、港に来てくれ」
「え?」
「お前は絶対来ることになる・・・」
「それってどうい・・・」
「俺もそう思うよ、芳香」
「麻壱まで、どういう意味?」
「内緒w」

もっさんが帰った後手紙が届いた・・・。
お父さんの行方が知りたいから?
ウソつかないでよねw
1年間一緒に過ごしたから、心配なんだよ??
姉ちゃんって一度も呼ばなかったけど、立派なお姉ちゃんだったよ、芳香・・・。

「やっぱり来たか宮藤!」
「はい・・・って麻壱!?」
「ははははw俺はいかないけど、ね。しばらく会えないのなんて分かり切ってるし、帰ってくる気ないのなんて分かってるし、だから、だから、お別れのあいさつ、ね?」
「何言ってるの?お父さんの事が分かったら帰ってくるよ???」
「俺にウソは通用しないからね、芳香?向こうには芳香の力を必要としている人がそこの人を除いて9にいる・・・。ちゃんと、ちゃ

んと守ってよね?仲間を疑わず、ちゃんと頼って・・・それで、元気で帰ってき・・・・て」
「な、泣かないで???」
「泣いてない!じゃぁね!芳香!!!坂本さん、芳香めちゃくちゃきたえちゃってください!」
「あぁ、任せておけ!」

「さようなら・・・芳香」
また、会う日まで・・・。

転生。（後書き）

主人公は、芳香に対しものっそいシスコン設定ですｗ
そして、
ロリコン・シスコン・ヤンデレ・ツンデレ・人見知り
という要素が入っていますｗ
ツンデレ以外俺・・・じゃないかｗｗｗｗｗ
ヤンデレは特定の人にしか発生しない俺↑

俺は俺のすべきことをした。（前書き）

1期の5話直後で6話直前のころへ早送り↑

俺は俺のすべきことをした。

「今日は新しく入る仲間を紹介する！仲埜入れ！」
「はい！！」

男の子？とか声きこえたぁぁぁｗ
ま、声変えてるんでｗ
芳香に会うまでは俺は声かえるぅぅぅｗ

「初めまして！仲埜麻壱です！こんな声と性格ですが、よろしくお願いします！はやく戦えるよう頑張ります！！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「よ、芳香ちゃんどうしたの？？」
「宮藤、どうした？そんな顔して・・・？」
「ま、ま、」
「ま？」
「麻壱！？」
「え？一体何のことやら？俺はあなたを知りまｓ「麻壱？」はい！すみません！すみません！ごめんなさい！ほんと冗談です！もう嘘つかないです！ごめんなさい！！」
『・・・・・・・・・・』

一同唖然。
エイラーニャ！
リーネ！！
ハルトマン！
バルクホルン！！
大好きだぜ！

シャーリー！
ルッキーニ！
のんびりってところが大好きだぜ！
ミーナさん・・・坂本さん・・・・・。
かっこよすぎます！結婚してくだｓ（（
ペリーヌ・・・おま、ツンデレ萌えるわｗｗ
芳香、かっこいいよｗでも、腹黒いよｗｗ

「・・・知り合いなのか宮藤？」
「知り合いも何も妹ですよ！！」
「いや、違うトモダチダ」
「なんで棒読みになるんだ、仲埜？」
「イヤ。ノリデ」
「まぁ、もう一人いるんだ、入れ！」
「咲本菜摘です！お願いします！体力だけは自信あるので雑用任せてください！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ！？」
「んなっ！？」
『麻壱！？
菜摘！？』
「また・・・知り合いなの？」
「・・・帰れ・・・・・頼む今すぐに帰ってくれ！！」
「麻壱、絶対いやだね！」
「まじ、ホント頼む・・・ぜってぇ沙良がくる・・・だろ？」
「多分ねー・・・・・・・・」
「芳香・・・」
「なに？どうしたの？」
「いままでありがとう、元気でね。俺は今日このひを持って死にます！」
「待て、なんなんだお前らは」

記憶を取り戻したこと&俺と菜摘、沙良のことを話した。
そしてみんなは俺が菜摘の口をふさぐのを疑問に思っていた。
あのですね、１９４４年にはまだない言葉を言わせれませんって↑

「へー、まぁ、いいケド」
「あはははは・・・・・・」
「はぁ」

俺と芳香、そしてエイラは夜間らしい↑
４人寝れないだろ！
つぅかエイラの目が怖いから俺は、床で寝るって言ったw
床で寝るのが好きなんだーって言って。
あながち嘘でもない↑

「それにしても暗いねー」
「そうか？」
「ごめんねサーニャちゃん、部屋こんなにしちゃって・・・」
「いつも、こうだから・・・」

必死で顔をそらす俺。
背中を向けて耐える。
だめ、かわいすぎ、ちょ！
この３人駄目！
俺のストライクゾーンど真ん中！！
俺の記憶の話詳しいｖｅｒとか当たらないタロットとかやっていつの間にか俺たちはねた。
サーニャと芳香の誕生日か・・・。
ま、プレゼント買ってあるのですよｗｗｗｗｗ

二人分、を、ねwwwwwwww
芳香は、俺が頑張って作った腕輪で
サーニャはエイラと色違いになるようにネックレスw
シンプルww
ガンバって魔法力こめて作ったから
この3人の危険は俺が察知できるから、守れるは、ずw

俺は俺のすべきことをした。（後書き）

それでわ！
明日は課題のポスターやるので！
ノシ！

目のやり場に困る回　（前書き）

長くなるのでわけますw

目のやり場に困る回

「うわー汗でベタベター；；」
「じゃぁ、汗かきついでにサウナにいこう」
「サウナか・・・んー苦手なんだよなぁ・・・」
「サウナ？」
「ほぅ、宮藤はサウナしらないのか・・ふふっ」

・・・エイラ怖いっす、笑顔が怖いですb
あっれ、まって、ん？俺一緒に入っていいの・・・？
いや、一応女ですけど、って入らないっていったら芳佳が怖いな・・・入ろう、入りましょうｗｗ

「うぅー、これじゃさっきと変らないよぉ・・・」
「スオムスじゃ風呂よりサウナなんだぞ」
「サウナは菜摘と入ってどっちが先に出るかとかやってたなぁｗ」
「麻壱は知ってるんだ・・・ってサーニャちゃんって肌白いよねー」
「っぁ」
「どこ見てんだお前」
「・・・ぁ」
「いっつも黒い服着てるから余計目立つよね」
「っは！サーニャをそんな目でみんなぁぁぁぁ」
「・・・芳佳天然たらしだからな」（ボソッ

俺のつぶやきは誰にも聞こえてないって言う・・・ふはははは・・・は。
いや、本当に天然たらしですよねー・・・。
だってだって、俺芳佳と一緒に暮らしてたけど駄目だ。
気付かずにやってるんだろうけど、ちょっとやばかった・・・ｏｒｚ

萌えるとかの次元こえちゃう・・・こえたら夫婦がなくなっちゃう！？
って思って耐えてたけどさ。
俺偉いよねｂ

「こっちこっち」
「本当に大丈夫なの？」
「サウナの後は水浴びに限るんだ」
「確かに冷たくて気持ちいいけど・・・」
「恥ずかしがるなよ！女同士だろぉ！？」
「だって・・・」
「いや、俺の方が目のやり場に困るんですけど・・・」
「麻壱も女の子でしょ！？」
「ららー・・・ららららーら、ららららー・・・」
「なぜだろう。なんかこう、ドキドキしてこないか、宮藤、仲埜」
「うん・・・」
「のぞき見はよくないんじゃないかな、ねリトヴャクさん？」

サーニャって云えない。
言えるわけがない。
だって恥ずかしくない？
初対面だよ！？
芳香はここ最近一緒にいるからいいけどw
俺あったばっかw
というか喋ったのさっきの部屋での会話がはじめてだからw

「あ・・・あぅ、ごめんっ」
「なんで謝るの？・・・それとサーニャでいいよ？」
「いや、邪魔しちゃったから」
「あ、了解です」

「あの、素敵だねその歌」
「これは、昔お父様が私のために作ってくれた曲なの・・・」
「お父さんが？」
「ん？」

「小さいころいつまでも雨の日が続いてて、私が退屈して雨粒の数を数えていたら、お父様がそれを曲にしてくれたの」
「サーニャはお父さんの勧めでウィーンで音楽の勉強をしてたんだ」
「素敵なお父さんだね」
「俺の家じゃ考えられないなぁw」
「宮藤さんのお父さんだって素敵よ」
「ふぇ？なんで？」
「お前のストライカーはお前のお父さんがお前のために作ってくれたんだろ？それだって羨ましいって事だよ」
「あはは。だけどせっかくならもっと可愛い送りものの方がよかったから」
「贅沢だなぁ、高いんだぞ、あれ」
「芳香らしいけどねw」
「あははは・・・」
「っふふ」
「はは」
「っは」

そのあと4人で笑って。
本当は3人なんだろうけど、ごめんね、皆俺邪魔だよな・・・orz
けど、この3人は笑ってた方がいいんだよw
早く戦い終わらせて会いたいだろうなぁ・・・。
戦いなんてやるもんじゃないよ、中学生くらいの年からさ・・・。

目のやり場に困る回　（後書き）

はい。
わけます。
戦闘ですしね。
すいません
長いんで
もう、作者には無理ですｗｗ

ほら、言ったじゃないか！（前書き）

ほらみろ！
台詞多いの癖って言われてただろ！
お前は馬鹿か！
と
リア友から怒られました↑
あれ・・・いつ教えたっけ・・・これ・・・リア友こえぇ・・・・。

ほら、言ったじゃないか！

え？今の状況説明？
・・・・・・・・準備中ですね。
んーストライカーユニットよくよく考えてくださいね。
持ってないです、僕。
はい、持ってないはずなんですよ。
まじで、もう。
なんでお前がもってんだよ！！

「いや、目で訴えられても、喋ってくれないと俺わかんねぇし」
「・・・・・・・・・・・・何であんの？俺の・・・」
「飛ぶには必要だろ？」
「いらな・・・・いります、はい、すいませんもう逆らいません。ごめんなさい」
「仲埜さん、あなたはなぜストライカーユニットを所持していなかったの？」
「えっとー・・・・あはは・・・おいてきました・・・はい、忘れました」
「・・・・・・忘れた？」
「言い訳になりそうなんで詳しくは言いません。すみません、そこまで気が回らなく忘れてしまいました」
「麻壱・・・ちょっと」
「んー？」

「なに？」
「凌ちゃん、居場所分かった。でも手届かないところにいる」
「・・・今のところ６話と全く一緒の内容だけど、戦闘だろ？今から。どう変化するかによって行動変えなきゃいけないよな・・・？」

「あぁ、じゃないと凌ちゃんにまで影響するかもしれない」
「わかった、ありがとう菜摘」
「どういたしまして」

パンッ

手をたたき合った俺たちはそこで別れて飛行準備に入る。

「・・・く、暗いね」
「ここまで暗いのか・・・」
「怖いのか？」
「さ、サーニャちゃんが手を握ってくれたら大丈夫な気がしてきた」
「なんでそうなる」
「・・・っ」

サーニャってよくわからないんだよなぁ・・・。
んーと、あれ？
芳香の事好きなんじゃないよね？
えっと、エイラでしょ？
えっと・・・えっと・・・。
天然たらし、さすがに旦那がいる子に手出しちゃダメ・・・。
って、ちょ、ま

「俺おいてくなよ！！！」
「あ・・・ごめん麻壱！早くー」
「・・・・・くらいの苦手なのに一人って・・・あぁ、もう！」

えっと、ここらへんでネウロイの歌が聞こえてきて攻撃態勢だっけ？
サーニャが離れてストライカー故障、そんでもってエイラ&芳佳の
言葉により目が覚める？

３人で戦う、だよな？
簡単に言えてないかもだけど言っちゃえば。

「全くおいていくって酷くない！？俺暗いのまったくもってダメなのに・・・あぁ、もういいや」
「ごめんってば、すっかり忘れてた」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・忘れられてたの、俺の存在」
「えへへ。あ、そうだ・・・ねぇ聞いて！今日は私の誕生日なの」
「なんで言わなかったんだ？」
「お父さんの命日でもあるから」
「馬鹿だな、お前。こういうときは楽しいことを優先してもいいんだぞ」
「そうかな？」
「ん？ラジオ・・・？」
「わぁ、すごい」
「あのな、今日はサーニャｍ・・・」

歌・・・・・に聞こえねぇ・・・。
だって俺が知ってる歌ってこういうのじゃないからな。
雑音とまでは行かないが歌に聞こえない。
そもそも感情こもってるように聞こえねぇ・・・・・・・・・。

「これ、歌だよ！？」
「落ち着け芳佳」
「どうして・・・」
「敵か？サーニャ！」
「どうしたの！？」
「だから落ち着ｋ「３人とも避難して」

くそ！予想ついてたのに何でもっと早くうごけねぇんだよ！
また守れないってことは、ないよな？
二人がいるから大丈夫だよな・・・？
・・・・こんなときに何考えてんだ俺！
しっかりしろ！守るんだろ！？

「何やってんだよ！馬鹿！」
「敵の狙いは私、間違いないわ。私から離れて一緒にいたら・・・」
「何言ってんだよ！」
「そんなことできるわけないよ！」
「・・・サーニャは敵の居場所を教えてくれ。大丈夫私には敵の攻撃なんて当たらないから」
「保険は必要だろ・・・シールド貼ったことないんだよな・・・面倒だから」
「麻壱・・？」
「あいつはサーニャじゃないあいつは独りぼっちだけど・・・
『サーニャは一人じゃない！』
「だから、手出させねぇ。絶対」
「私たちは絶対負けないよ」
「大丈夫、絶対勝って見せるから」

・・・・・・天然たらしほど怖いものはないー。
笑顔が素敵だね、芳香さんっｂ
って・・・集中集中。
実際シールド貼ったことないのは事実。
それにさっきからなんか変な感じするんだよな・・・。
気のせいか？
でも、なんか身に覚えのあるような・・・んー。
そんな事を考えてる間にサーニャはエイラに指示を出してる。

・・・芳香もシールド貼ってるし、サーニャは乱射してるし。
って・・・まて俺なにもしてない。
え・・・・・・・うそ、だろ。
まて、ついてけねぇぞ、これじゃ。
倒したよな？今。
なのに、何で後ろからサーニャに向かって飛行物体が・・？？

〔麻壱！後ろ！今すぐ3人を守れ！！〕
「菜摘！？」
〔気のせいじゃない！やっぱり俺たちだけじゃない！あいつらだってこっちの世界にきてる！〕
「くっそ！サーニャ！危ない！！！！！」

間に合え！
頼む、こんな急展開なんて望んでねぇんだよ！
間に合え、間に合え間に合えーーーーーーーーーーー！

「ってぇ・・・ギリギリってとこか？」
「ま、麻壱！血が・・・」
「え？気にするな。こんな急展開望んでませんよ読者さんは」
「何言ってるの？」
「ちょっと現実逃避をね・・・。さぁて、来いよ。まだ終わりじゃないよね？」
「・・・はは、さすがにバレちゃったかな？君たちがにげてくれたおかげで面白そうな世界にこれたよ」
「手、出したぶっ殺す」
「へぇ、また大事な人作っちゃったんだ。消されたら心壊れちゃうのに。学習したら？」
「・・・・・・・誰、この人」
「え？あ、んー。悪友？」

「嘘つかないでよ、麻壱。私はこれでも麻壱の姉だよ？」
「まぁ、こいつ追っ払った後で、ね？」

ほら、言ったじゃないか！（後書き）

次回につづｋ・・・わからん（おま
次回はバトルシーン＋麻壱が気付かないうちに戦闘が終わっていた理由。
などなど。
攻撃？してきたやつ誰？なにこのてんかい
はい、わかってます。
来週にはうｐします。
２話にわけてうｐします。
すいません、来週にちゃんとわかるはずです。
はい。・・・・馬鹿でごめんなさい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9678m/

百合好きな作者が転生したら何をするか←

2011年2月21日21時37分発行